

(明治二十六年一月廿六日)
(内務省許可)

義方丈艸誌

第
六
編



義太夫雜誌第六號目次

論漫寄傳古文
說言書記曲園

批評

雜錄

雜報

餘興錄

(社告)

義太夫謠曲の壽天
義太夫節を聴く人に
東西を有髮
蟬々
桃の屋鶴彦

越路太夫小傳
竹本綾之助小傳
上るり十二段(承前)
歌句數首。はり扇(二)
かす
七文字屋微笑
小野通女

大隅太夫
見て見ぬ人
竹本小虎
竹本播之助
一句の評判(二)
竹本越子(承前)
六月三日東橋亭
石本亭初晩評
忠臣講釋誤解の辨
假名遣
有髮の事(再々)
在京女義太夫の番附發表に就て一言
大隅太夫の一座○床本の豫約竹豊連○金杉
ドクトル○竹本熊榮嬢○觀音靈記壺阪寺○
燕太夫○演藝月並勉強會
冠句附○一口釋
太平記忠臣講釋
相模入道千疋犬
近松門左衛門
近松半二男

七文字屋主人
あほひ女
花の家
堅胃堂優
瓣香醉
未廣家要
翼々居
豊竹新呂太夫
義太夫雜人史
釣深亭主
人史

前號より最も編輯に注意を加へ且つ少しく改良の上毎號古人の傑作を附録とし掲載す

前頭 竹本小土佐 前頭 豊澤 福玉

◎義太夫練磨會廣告

本會は明治廿五年の九月創立せしものよしして會員既に三百有餘名の多きに至れり本會の要旨は採長補短を本とし切瑳琢磨の効より義太夫謠曲の進歩を計り俚俗の快樂をして優逸ならしむるにあり左れば入會を望まる。諸君と藝人と否とを論せず黨派を問はず老幼男女に關せず廣く之を應ずるものなり規則書を要せし郵券二錢封入本社内左の者宛まで御申込次第進呈すべし

廿六年三月 事 幹 樂壽亭 壽樂 七文字屋 微笑

(速記彙報)

正價 一冊 八錢 十二冊 冊前 金九 十錢 全國 無送料

速記彙報第五十二冊出づ、築地活版所長曲田活字は就ての話は明治五六成君の活字世界の有様を讀者の眼前に紹介せり、土耳其より歸朝せられたる。土耳其風呂山田寅次郎君の快を覺ふ一讀、土耳其風呂に浴するの快を覺ふべし、偶田川浪五郎談話手品師、武藏西北部の慶應二年横濱出帆より桑港着までの船中の奇談を、速記に關する言は讀者を驚かすべく、速記に關する論說雜報は速記者及速記修業者を益すべし 東京神田區裏神保町一番地

速記彙報發行所

(社告)

前號より最も編輯の注意を加へ且つ少くも良の上毎號古人の傑作を附録とし掲載す

前頭

竹本小土佐

前頭

豐澤 福玉

大關

竹本 小清

前頭

竹本 津賀蝶

關脇

野澤 素行

同

竹本 廣竹

小結

竹本 小住

同

竹本 小染

前頭

竹本 三咲

同

竹本 若造

前頭

竹本 東代玉

同

竹本 花陸

前頭

竹本 照勝

同

竹本 東滿玉

前頭

竹本 駒之助

同

竹本 京力

前頭

竹本 大和

同

竹本 團登

前頭

竹本 小虎

同

竹本 豐登

前頭

竹本 榮系

同

竹本 鶴巴龍

前頭

竹本 鹿の子

同

竹本 春之助

前頭

竹本 音女

同

竹本 勘里

見後 忽 竹本東玉

人 豐竹一二三 氣 竹本住之助

人 竹本愛之助 氣 竹本越子

リヤチ 竹本播之助 練 竹本小傳

勸進元 竹本京技

大關

鶴澤 花友

前頭

竹本 京駒

關脇

竹本 小政

同

竹本 榮系

小結

竹本 網巴津

同

竹本 京富

前頭

竹本 燕玉

同

竹本 扇蝶

前頭

花澤 柳

同

竹本 網清

前頭

竹本 土佐吉

同

竹本 小春

前頭

野澤 鶴蝶

同

竹本 廣菊

前頭

竹本 熊梅

同

竹本 宮造

前頭

竹本 清玉

同

竹本 春八

前頭

竹本 駒辰

同

竹本 文花

前頭

豐竹 錦

同

竹本 駒子

ん せ み さ

三味線

鶴澤

三生

席

定

ヨツヤ

金澤亭 萬玉井 富本亭 和泉亭 川平亭 琴川亭 小柳亭 新柳亭 伊勢亭 若竹亭

老

練

子

供

竹本 千歲

竹本 岡之助

竹本 氏八

竹本 岡德

竹本 小志

竹本 浪志

竹本 湊司

傳之助

數米

濱子

宮原亭 木橋亭 東本亭 石橋亭 立花亭 鶴澤亭 金澤亭 末廣亭 和良亭 吹拔亭 青柳亭

京メシ

送米

送米 送米 送米

義太夫雜誌 第六號

明治廿六年
七月七日

發兌

論說

義太夫謠曲の壽夭

釋迦は輪回を誨へ基督は始終を説く。誠や生者必滅。又始あるもの終あらざるはなし。淨瑠璃の發生以來此に二百六十有餘年の星霜を積み。義太夫節を沿革せしより二百又餘年の日月を移したりと雖も。之を日本建國二千五百有餘年と比すれば。實に人の一生あれば五日前に結し島田鬻の壽命なり。今や櫛けづりて結び直すべき時期も遅れし緑髮に。堆き塵埃を洗はず除かずして。其儘に打捨置は數日を出を其元結も朽ち切れて。美人の艷容も傷おべし。人の毛髮は時節と健康の如何に因て違はあれど。大抵平常と一晝夜と殆ど百本を脱し又百本を生すべし。社會の新陳代謝も亦其如し。人逝き人來る間も世の文物も變遷し。音樂の玩味も從て易る。故に間斷なく練磨を加へ。改良も怠らずして進歩を計るは音樂家の務なり。倘之を怠れば進みし社會の玩味も適せず。老朽陳腐として退けられん。是猶美女の島田鬻も二日を越ゆれば却て其身の汚となるが如し。我義太夫節の二百又餘年の齡も二日の島田鬻に異ならず。今や殆ど陳腐に属し去らむとするの秋ころ到

れり。嚙昔は九關に

聖慮を慰し奉り。或は諸侯諸士の愛玩。鄙俗一般最愛の樂たりしも。今は殆ど無學文盲ある婦女子の糊口具となりて勢力あるものゝ如し。今東京に此道は就て生を營む女百を以て數ふべし。而して男子は其半にも及ばず。斯道の牙城とも稱すべき浪華の地は於ては。如何なる運動を爲しつゝあるやと云ふに。越路丈の如きは最早養老退守の策を取らんとするにあらざるかの歎あり。松葉屋は天性音樂の妙を得たりと雖も。今は技道の研究よりも寧ろ資産の處方に忙しきにはあらざるか。團平丈齡殆ど古稀なるも猶鏗鏘。斯道絃樂の熟達。樂譜の博識。日本無雙と稱せらるゝも決て満足の色なく。頗る練磨に熱心深き人なるも。今此丈の門中にて丈の善を悉く受け收むへきの器量あるものもあるや否や。天下若し團平を失ふの不幸に遇ひ。今の衰頽を挽回せざるの道何れにあるや。大隅丈少年の頃より斯道に熱心。其苦心を積し結果は所謂大關たるを得ること此に年あり。又其赤心は於ても尋常ならず。身は壯健にして音聲は故柳適丈の如く大ならず。越路丈の如く美ならずと雖も音律に欠乏なく。八方に遍く通し此上も大に熟練を積むの餘積あるべく。又大に古曲を探究し識量を崇むる器あるべしと雖も。若し將來に於て斯道の資格を遂さず。一層進むて文明人の愛技となり。盛榮を致さむとを望まば。是等の技藝家宜しく文明海の識者と一致を爲さざる可からず。否らされは斯道は腐敗し去らむ。請ふ次號に之が説明を試ましめよ。

(未完)

おもふことまゝのうちにのまされきて

またあふまてのたのしみにせむ

竹

田

またあふまてのたのしみにせし

漫言

義太夫節を聴く人に

諸君の萬福大賀此事でムリ升さて毎々本誌購讀の榮を與へらるゝ事誠ひ有り難く存し升今日此題を記し諸君の清眼を汚す事となりましたソハ諸君も御存じの通り此頃の様は義太夫節の隆なる事は實に往古から例なき事事でムリ舛之れが眞實隆盛に赴く萌芽か又は衰微となる前徴か分りませんが榮枯盛衰は社會に免かれ難き事實でムリ升から目下に於て夫をどうのこうのと申譯でもありませんが此に一つ嘆かほしき事は義太夫節を聴く人の耳でムリ升私か先年地方漫遊の折義太夫節の根本とも申升大坂名古屋西京の方へも參り到る處義太夫節を耳にしましたが一統謹て聽き升ことは恰も水を打た様と申ろうか誠に静かにて感じ升處乃至れば時々喝采の音を聞く位で何となく奥床しく流石は本場の耳だと人に話した事もムリましたが當府下のは只ざわゝと喧しく特に嫌な癖と思はるゝは中途にて歸ることでムリ升元來眞打と申せは如何に下手とて口語りよりは上手でムリ升夫に眞打を目當に來ることなれり少しは心に満足せざる事があるとも口語に辛防せし程の耳なれば切まで聽居ぬと云ふ譯はない筈でムリ升癖の證據には大隅越路の一座にても是が有り升一つと禮を知らぬ様に思はれ升本場の人はさだめて笑ふて居ることでムリませう。

昔し唐土の朱文公が「一寸光陰不可輕」と云ふ詩を作りまして時間ほど大切なものとないと申ました當

府下は學者の巢すでムリまして時間を惜おぼむ人ばかりですから其結果として或は彼様な現象があるのかも知れませんけれども鬱散うつさんの爲とか保養はやうの爲として之に與へたる上は豫定かりだめの時間より謹ゆづか二十分や三十分余計よけいに費せしとして左程害にもならぬかと思ひ升若し夫程までに必要の折ならば望のぞむ快樂たのしみを割さくより寧ろ行かざるが宜よろしかと存ぞんじ升中には負まけ惜おしみにも我ハサワリだけ聞くものありと云ふ人がムリ升が義太夫節の旨味うまみはサワリより外に多くあり升夫を知らずして義太夫節を好このむと云ふは耳がないと云はれても仕方がないわけでムリ升諸君よ若し此語にして御意を得は中途に歸るの惡弊わるまけを途みちかれんことを願ねがひ升聊いさか禿筆ちやくひつを揮ふるひました是で御免を蒙まもることも致いたし升。

寄書

東西と有髮

桃の屋主人

本誌第五號の紙上よ花の屋主人が東西とうざいといふ事ことの理由わけを述べられたると釣深亭主人が嫩軍記熊谷陣屋の場ばの詞ことばに有髮あはげの想おもといへるとの解とくをせられたるとお就つて余あも亦豫かねて記臆きおくせしことことのあれば聊いさかいつけて二子の参考さんこうにせまほしう思おもへるあり

東西といふことは劇場寄席等を始め人寄の場所に
 は角力場のみならず遊藝の席上一般の常套語じょうそうごといふことは、
 起りし時角力男一同が總立ちゆうたつとなりて立騒たちさわぎしを其場そのばお
 出張の町方與力同心等が大音聲を掲げて鎮しづまれ東西の
 者共コレ東西の者共と言ひたりしに水を打ちたるが如
 く忽たちまち鎮靜ちんせいたりどのが起原おこりにて其後騒動さわどうを鎮しづめる時
 には其口眞似まねをなして靜かにせよ東西の衆コレく東
 西の關取とやうにいひたるが後には單に大聲おほいにて東西
 くといへは制せいしの聲こゑと思へるまでになりゆき遂ついも

は角力場のみならず遊藝の席上一般の常套語じょうそうごといふことは、

東西くといふことは劇場寄席等を始め人寄の場所に

は角力場のみならず遊藝の席上一般の常套語とはなりしなりとぞ

一の谷嫩軍記熊谷陣屋の場に「暇の一件かくの通りと兜を取れば切り拂たる有髪の想」とあるは解し難し想と相は誤寫とするも切拂ひたるに尙有髪といふは如何ぞや無髪といふて通ひたらんにといふが論者の疑問なるが是は今日歌舞伎にて今道心的の坊主天窓の熊谷を見るが常套とあり居る故の疑問にて元來熊谷は此場よ

て暫時奥間へ退き大將鬚の髻をを切拂ひて有髪の僧形あさまを變へ表面に大あらめ鋏形の兜を着て出るが本式にて作者の意も亦こゝにあるなり此場の事情といひ時間といひ斯くありてころ咄嗟の間は落髪發心の体を表して至當とも見るべきなれ然るを今日の如く天窓は逆剃にても掛けたらんが如く剃てぼちて眞のくりく坊主となしたるは後人の作爲にて全く本文には副はざるなり然れども此天窓の方がどうやら俗眼より蓮生坊

らしくも見ゆ袈裟白無垢の扮装も良くかの『十六年は一昔ア、夢だく』のあたり殊勝氣に見て至極演戲としては宜しからんなれどもチヨボの淨瑠璃とは全く齟齬をることみなりしなり原剃髪ならねはころ殊更に有髪の僧と斷りたるなれ……僧を無髪といふの用なし余も未だ古版の丸本を調べざれば確とは斷定がたけれ共原書よさうとあれは相らうとあれは僧ならん想はもとより誤寫なり。

微笑曰 前年故延若が金澤富山地方にて興行せし際一見せし事あり其折は熊谷か『斯の通り』と兜を取れば切下げ髪にて肩にかゝりし橋供養も遠藤武者と渡邊渡が發心の意を示すも切下となるなと武士の初めて發心する時は髻を切て其意を示すが定ならん乎想の字も假名にてありしを筆者の誤り傳しものにやあらん釣深亭主人の説も面白し尙別項に記したれば参考あれ

傳記

越路太夫小傳

峯の家霞

越路太夫姓は二見名は金助幼名は龜次郎と云ふ父ハ伊勢屋七郎兵衛とて塗物問屋を業とし大坂順慶町三丁目に住す龜次郎五歳の時同市内本町太郎左衛門町大工職の棟梁大和屋伊八の養子とある性義太夫を好み十一歳の時三代目鶴澤清七に就き三味線を學び廿三歳の時竹本春太夫の弟子とる南部太夫と稱す三代目野澤吉兵衛其技能を愛し江戸に連來りて八丁堀植木店ふ於て興行す于時廿五歳評判頗る宜しかりしも尙語調を整へん爲錢四十八文を懐にし毎夜護持院ヶ原に到り大聲を發して之を試み喉頭の渴く時は夜たか蕎麥の湯を求め一回十二文にて四回を重ね歸宅するを常とせり斯の如きもの一年半なりしといふ吉兵衛の父野澤勝鳳後ハ竹本越路太夫といふ南部の技藝上達したるを以て父の名を

繼しめんと春太夫に謀り後ち二代目越路太夫とる江戸に止る三年歸阪の上文樂座より出勤し止る二十年藝の上達と共に位置も亦進み櫓下に其名を署せしは明治十六年の四月より此間九州より下りしこと前後三回明治十八年再び上京淺草の文樂座に興行する五十日其より各席に出勤評判益宜し遂に有栖川宮家を初め諸大臣の招を蒙る數回又榮なりと云ふべし丈思義も感ずる厚く今も居室には春太夫吉兵衛兩師の肖像を掲げ敬慕怠らずとなり。

竹本綾之助小傳

七文字屋微笑

綾之助姓は藤田名はろの明治八年八月大阪南區に生る四歳の時藤田かつ(實母の姉)の養女とる九歳初めて義太夫を養母に學びしが強記の性にて進むに速く實に人をして驚かせし程あり十歳にして上京暫く綾瀨太夫の門弟となり落語の一座に加はり各席を興行せしか特別の評判よく十一歳の十月初めて一枚看板を掲ぐ其時

新柳亭にて興行せしは人氣並びなく干今衰ふるなきは

越路太夫といふ南部の技藝上達したるを以て父の名を

の外評判よく十一歳の十月和...

新柳亭にて興行せしは人氣並びなく干今衰ふるなきは
實は榮なりと云ふべし特に無本にて演伎するは最も人
の感する處且其音聲の優美なるは今回投票せし五名家
の一人美音家も當撰せしにても知らる越後名古屋箱館
地方より屢々興行を進むる者あるも未だ一回も出でし
ことなしと以て府下の人氣を知るべし。

古 曲

上るり十二段 (承前) 小野 通 女

しのひのたん

八たんめ

そのゝも御ううしは上るり御せんのもんのほどりにし
のはせたまへてみたまひはいまたうちはしつまらず今
やおそしとまたせたまふ御すかたを物によくくたど
ふれはすみよしのまへにふたはを引うへてつか引うへ
しはま松の千とせまつよりをひさしみねのあらしも
のとけてたよのおがそもなみたゝすうゑすむほどに

なりしかは今のぢふんはよかるらんと思召もんをおし
て見たまへはいまたてうはざゝさりけりかた戸をきり
ゝとをしひらきうちたち入みたまへはおりおしこん
やのはんしゆはみたわう御せんやそつ物とおきころ
はゝになてして月さへはさきへさうしなはきゝやう
つほねにかるかやはすわうむろすみあかしは御まへさ
うその十五夜そふはしめとしてむねどの女房十二人さ
ゆふのつま戸にたかれけり女房たちのろの中に十五夜
御せんうたの歌よろへてどかめけるたろやゝなるとの
れきにれとするはあまがつりして歸る舟人かどゝかめ
ければ御さうしは聞召きこしめいやとよ此くわじやは月にろふ
かつられのまて有けるかまよひのくもにたてられ是れ
まてまいりさむろふなり月み入さの山のはをおしてた
まはれ十五夜いかにと仰せける十五夜このよもうけた
まはりさらはこたへ御入候へとて下八十人中八十人
上八十人として二百四十人の女ほうたちのばんをつとめ

ていたりしろの中をかきわけおしわけ中のていまでお
 くりまいらせろれよりはるかにゆきさてまつゆんでに
 あたりつゝ一むらすゝきをかいたるしやうしのみへたる
 はそらさゆ御せんにつほねなり其そのならひに月とうさぎ
 をかいたるしやうしの有けるは月さゆ御せんにつほね
 なりろのならびたけにうぐひそかいたるしやうしのみ
 へたるはれいせいどののつほねなり其つぎに菊きくまから
 くさかいたるは玉たまものまへのつほねなり其あらびにつ
 るとかめとをかいたるしやうしの見へたるはせんしゆ
 のまへのつほねなり其ならひに三ほんかしわをかいた
 るはさらしなどののつほねなりろのならひにひめこ松
 をかいたるしやうしのみへたるはありあけでせんのつ
 ほねなり其つぎよおしどりつがいかいたるしやうしの
 みへたるはみたわうでせんのつほねなりそのあらひに
 ほたんしやくかうつはきをかいたるしやうしの見へた
 るはなでしこどののつほねなりろの次つぎにはおにとりて

三味線をひけるもの、旅たびたつをお

はぬとさくら七重ななへさくらに八重やへさくらうきひしほかま
 こきくれなひみやまのおくのくも井にまきるゝうすさ
 くらをかいたるしやうしのみへたるはなさゆでせん
 のつほねなりそのつぎまいけよはちすどかいたるしや
 うしのみへたるはみづからがつほねありろれよりえる
 かにゆきすきてくものそりまへにしきのとちやうよは
 せを、かいたるしやうしころわか君きみのひとまどあるへ
 のかよひみちありたひのどのといちくしたいにおし
 へつゝおくりまへらせ候そのか其身はつま戸かへに歸かへられける。』

文

園

竹本住太夫難波なにはにかへるなごりに

新薄雪物詰刀鍛冶しんうすゆきものぢりかたなの段をかたるを

きよてよみてつかはしける 蜀 山 人

のぼりては又またきく事こともかたを鍛冶かじ

らい國くにとしを待まつぞひさしき。

るはなでしてこの、つほねなりうの次にはちいも

三味線をひけるもの、旅たつをお

くりはべりて 山道 高彦

さみせんの暇乞して兩方へ

ひきわかれぬるおくり三重

素人義太夫 桃の屋鶴彦

世話ものにあつくもなりし野崎村

きうこしらへのけふか皮切

はり扇(二) かすみ

本郷切通しの廣通りは近頃新築せし同樂亭とて義太夫

の定席。軒頭の看板ふ竹本瑠璃の助とあるは大坂登り

の女太夫。藝も容色も備りたるどて賣出しの別嬪。人

氣の盛あるは下足の敷にても知られたり。『オイ此處ダ

と車を止めて下るは義田と京地の二人。可來の聲を半

分開流しサモ忙はし相に飛込み。『丁度申入だど口占な

がらワザと隅に坐を取り四方を睨回し京地を振りつた

義田の聲『今夜も五百人位だナ。

如何なる佳肴珍味も庖を見てと喉頭も通らぬと諺の通

り。何事も見ぬうちが花。高坐で別嬪と掛聲されし女

太夫も。樂屋でシガラなく居行義をくづした状態を見

たら。それこそ如何な粹様も。これはくいと愛想の盡

るなるべし。中にそ之か千兩の半圓の鮎は鼻うごめか

し。お禮が聞たい専門か『今晚は御苦勞と。素見氣か慰

勞氣か。常套語を楯に樂屋をあらす自分免許の色男

さつても物好きとは腹の蟲めが管。實此社會の大明神

さまく。

喝采の中に切語を終ふて樂屋へ下りし瑠璃の助。『御苦

勞さまと一坐の挨拶を頭で受るから。弟子に背中の刃

を拭かせ少し振向て『春日は來て (春日こそ客の將議にて春

れぬと云ふ意味)『ハア前刻一寸顔を出して』そう何か云つ

て『いゝへ別よなんども』『わらい御心配筋だ子と顔を

出したは義田祐介『オヤマ能くわらつしやいました御

遠方の處を。京地さんも御一所でマお這入遊はせ。ど

こも同じことですからオホ。今夜は賑れ聴苦しかつ

たでしやう』イヤなか／＼上出来だつた『旨いことば

つかり被仰。何も散財ませんよ』イヤ冗談じやない子

君『ろうサ見物の喝采でも判断サ。折から木戸番がお

師匠さんと差出す一封の手紙。口の内にて讀ながら

『使が居ますか……只今直ぐ参りますから宜しくつ

て』何かお樂み。袂へ這入たい子『いらつしやいな一

所に『マサカ。義田は心配相よ』誰。『大山さんから

』左様かお樂しみ』オホ、大變の。

批

評

大隅太夫

服 霞 峰

君の始めて東京に入しは春子太夫の折にて明治十三年
櫻盛りの時なりし當時の東京は義太夫節の耳に幼なり
し爲左程の人氣もあらざりしが二十年の上京は越路太

夫が荒撫せし後なりし方も關せず否越路太夫に耳を破

られし東京は却て君の優藝に分別を興ふる媒となり人

氣を得しこと越路太夫に譲らず拍手喝采を負ふて歸阪

するや公平の眼は君を櫓下に進む壯年此位置を占むる

實に前例なし以て其藝の凡あらざるを知るに足る三回

上京の今回唯賞賛の聲君が身を掩ふのみ亦榮をりと

云ふべし

人の性として身少しく其位置を進むるや高慢の心起り

て止まず然れども君の生平此に反し人々接する町噂貴

賤を問はず殷勤貧富を論せず磊々落落々只是一箇の書生

而て孜々其道も怠らず君常に云ふ達したりと思ふは達

すべきの敵なりと宜哉此言君をして今の位置に至らし

めしも亦此語なり後者味ふべし今や去て阪に歸るや東

京の君を惜む大低あらざる也然れども大阪も亦君を待

つや切ならん嗚呼幸なる哉君嗚呼福なる哉君請ふ斯道

の爲に自愛せよ一言爰に記す。

見て見えぬ人

七文字屋主人

し爲左程の人氣もあらざりしが二十年の上京は越路太

見て見えぬ人 七文字屋主人

讀て解し得ぬと見て見ぬ人なり凡て人と争はんと思は、能く讀味ふての後にすべし見て見ぬに強ち争ふは是墮嘩買と云ふ者なり青山の堅胃堂と云ふ人予か嘗て越子を評せし中にオチャッビーの文字ありしとて予を誥る予はオチャッビーと記せしは相違なきもオチャッビーと評せしはあらず其は新云はすも見し人は知るなるべし其を予は誥るは見て見ぬ人なり假し評せしとするも予は斯く思ひばころ斯く記せしなれ人にはおもひく心の心あるもの也されはれもひくの批評出づるなり近き例が君の引照せし物は盡しにても知れ凄しとれもひ恐しと見しも其人は斯く見へし故斯く云ひしなり白をさして黒とは云はぬ者と予は思ふなり諺云ふ獵人は山を見ずと見て見ぬ人よ眼を公平にたもて然らざれば獵人の誹を得ん。

竹本小虎 麴町 知顔太夫

東都藝壇屈指の一人語り工合に少しく癖あるも無くて七癖と云ふ程のものなれば咎むるも及はず本来艶物なるも時代物とて悪からざる音色なり恨らくは今一層妙手の三味線を添はしめは幾倍の妙あらんに。

竹本播之助 本郷 あほひ女史

(頭取) 此もとは幼年ながらもチャリ語で御評判の播之助丈でムリ升 (娘共) おかしを目付する子が出ましたノレ御覽オホ…… (ヒイキ) 臆面なく語る處などは子供とは思へぬ位ダラれ又三味線の巧手には誰も舌を巻く實牙後世恐るべしダ (ムダ口) 前世の如何でしたノ (頭取) 東西く評言中はムダ口御免を蒙り升 (老人) チャリ語でと東代玉岡吉なども能くは語るが年も年ゆゑ有る筈のこど此子の特に容うけのするは時々道具を用ゆること之は前頃岡登齋喜笑軒あどが折々用ひたが夫からの思付

か何しろ笑はせ知ぞ(ツケ和) 祖父に當る執喜さんが餘程の熱心で文句も時世も合ふ様にと時々筆を入れ寄席へも毎晩同道して容うけが宜いと禿頭を叩て自分も一所に喜で居られる相ぞ(ヒイギ) 左様だろろう夫程の熱心でなければ彼様程にならぬサ(書生) 以前落語の席で見た喜政じやないか能く似て居るナ(ツケ知) 左様です能く御存しですね(若衆) 忘れてたまるものか(二統) イヨこちの播之助ぎんく。

一句の評判(二)

名古屋 花の家組月

大原に力かましや雪のかね 土佐吉
 ゆかしさや濁はなれて杜若 源之助
 蝶とぶやよらす放す花の枝 土佐之助
 咲たつもまだ是柄ぞ冬至梅 土佐玉
 きく度よ古きこゑなし杜宇 駒辰

竹本越子(承前) 青山 堅胃堂 優男

予このひやうは評を見て期藝このげいの爲に如何に憤慨せんぞ吾試このこみ微笑
 君ども問ひ參せんオチャツヒまわらとは如何に解釋致す可き
 や云を止よオキヤン。ハ子カイリお轉婆てんばの代名詞也先
 生足下彼の評判高き某姐の頭は於茶屁あちまの故に非る可乎
 又所謂變手古髻まげを以て高坐かうざに睥睨し給ふソンジヨ(微
 笑曰意味解し難し)予が愛敬する片露たかづほの姐の如き於茶
 屁いふかに非と謂乎古來於茶屁とは是等をころ申すべし先生
 は是好箇かうこの的例を捨て似も付ぬ越子令嬢こしやうも濫用す愕し
 と云ふべし斯藝このげいの爲め慎重しんじゆうを敬かれしは暮々も惜可し
 次は四號の物は盡つくなり其中に嬢の技を以て凄すびとし嘲あざけ
 らんとするものあり可畏こかしと云ひし者あり何たる頓珍漢
 あるや(微笑)曰餘興よけうに向て啄つひを入るゝ小説せうせつに向て取消
 を申込みし某地方警察署けいさつしょもサモ似たり敢て大方おほまも問
 ふ竹本越子の眼めは果て險貪けんこん癡惡ちあく陋癢ろうよくなりや(微笑)曰藪
 突ついて蛇へび是に答ふるもの有んや第一音羽屋ねんわのお化ばと

比するなどは人味憎と糞を混じ赤と白との判断つけぬ

比するなどは人味嗜と糞を混じ赤と白との判斷つげぬ方と見わたたり記者足下斯く不真面目の記事を貴重の上に載するは全く責なしと云ふや（微笑曰どういたしまして） 儲子は嗜好の道の爲に聊か辨解の勞を取りし（微笑識曰に御苦勞様）嬢は勿論諸姐も賛稱すること信ず（微笑曰自惚も此お至て極れりと云ふべし）。

微笑曰 貴稿未だ盡さざるも必要ならざる点は省く圈点を附せしは讀者の注意を引かん爲め微笑が所作まり諸君も賛稱すること、信ず呵々。

六月の東橋亭 千住 瓣 香 醉 史

鶴澤花友乃「お夏清十郎」お骨折の割合に客受のせぬに残念なり竹本愛之助の「御所櫻」天を過ぎて開苦いがサワリさなご御いひかき筋のヤンヤハお仕合 竹本土佐吉の「伊勢音頭」なか〜旨いものなり中にも万野の惡体口真にせまる竹本小政の「先代萩」箱り物なれば悪き筈に、醉史の案には東玉の次は先つ此人なり。

石本亭初晩の評

今度牛込の神樂坂へ新築になり、石本亭下町にも例のまき宏大なる建築

牛込 末廣家要人

本月十八日が席開にて小土佐の一座に燕玉のスケ云は、正義睦合併の大一座例に由り評を下せば燕玉の「戀女房」十八番の由なれど音聲も以前と替り去故受のまろく馬士歌を聞て「門付乃浪花節か」この評もあり程なり 扇蝶の「八百屋お七」は受ました 播之助の「太平楽」藝盡しが澤山で客は大よるまび 小土佐の「御所櫻」お得意なれば上出来の事今度は清花の三味線故十分に語らる、儼なれど又時々間ぬげしとあるもあり併し熱心にやらる、故か初晩から客留の大人氣とに近頃になき腕前なり此晚如何なる譯の湯呑が三つならびしは見にくかりし。

若し人ありて其口に然と云ひ其目に於て否と云は、其口を信ぜ エメルソン
 ずて其目を信ずべし……………

雑 録

桃の屋大人忠臣講釋誤解の辨

翼々居士

前號に桃の屋大人が忠臣講釋八ツ目大星由良の介が山科住家の段 彌鎌倉へ旅立せんとする條下に

由良の介心ははけみの聲高くコレく見られよか
 たぐ太白星しんせんよ現はれしうせいの光を奪

ふ時は味方に利ありとそんでが詞今の天さい其氣
 牙あたるは時の吉相さいさきよし云々とあり其文
 意を熟讀するよ太白星を師直に比し衆星を義士に
 比したるものならんには太白の爲に光を奪はるれ
 は義士其人達の大不利よて吉相よあらず仍て古版
 の本を調べ其他問合せなせしかども皆前文よ異
 ららず余が考案には衆星の下の字を省きしならは
 太白星が光を奪るゝ事に聞へて趣意も貫き又語る
 にも多數の文字を改めされい便ならん
 と説かれたれども是は少しく考へ過ぎたることと思は
 るあせならは此處は單諸士を勵まささんが爲に孫吳の語
 を引て時の天象を觀卜兆の語を引て見せたるに止り太
 白を不吉の星なれば師直に比すべしとまで考へるに及
 はず太白がしんせんよ現されて衆星の光を奪ふ時は味
 方に利ありと云ふ占に過ぎず故む孫吳の此敵討の如く
 敵は一人味方の多數の義士と云ふ者の爲に教へしよん

あらざるべし孫吳の時は戰國なれば一方よ三軍あれば
 敵にも亦三軍の師あるへし戰國の世は皆邦力戰略の競
 争なれば事情之に比すへき者は微し然るも斯孫吳の語
 は一般の出軍の時に占に用ひたる者なれば何の星を以
 て誰よ例へると云ふ様なことは此占に付ては多かるべ
 し恰も紫雲何の方に起れば何の兆ありとか惑星絃月を
 涉るときは軍起るの兆なると云ふが如くに見て可なる
 べし殊よ孫子吳子別人にして共よ云ひ習ひせし普通の
 詞と思へは左までこじつけるおも及はず但此所には少
 しあてはめよくき諭なれども辛抱して原本のまゝにし
 て置く方が宜しからむ寧ろ夫よりも今の天さいを天象
 牙あらためたし何よしても此處の語句此本中の拙なる
 部分なるべし時の吉相さい先よしなると云ふ語も大星
 などの語に似あはしからず猶識者の高説を乞ふ。

微笑曰 丸本よは時の吉左右幸先よしとあり。

敵は一人味方みかたの多數たすうの義士と云ふ者の爲に教へしよ

假名遣

豊竹新呂太夫

凡ろ假名遣ひの法を心得置くへきは、和歌をはじめ何れの音曲にても、いと大切なる事ぞかし、とりわけ淨瑠璃を學ばん人は心得置くへき事なんめり、若しその分別にして辨知らざれば、音あやわからず至て聞づらし、己れ幼稚かりし時、今は既よ物故りたる吾父鶴澤重藏より假名遣は付き聞き覺れたる事いと多し、今その記憶に存するものゝ中より要を摘み、淺きより深きに、近きより遠きにと逐次掲ぐるととあしぬ、博識冷聞ある本誌愛讀の諸君は、あるは、や丁知せらるゝことあらむ、されど一片老婆の心已み難くて斯くは物しぬ、見む人心してよ

割かな

九牛か一毛
越鳥南枝に巢をかけ

さうご割
てうご割

文字移り

相生の名はあるがうし
さびーき道すがら秋のなまみらを引けばあの字出る

ひらくかあけふおとさのどりにて

はを引けばあの字出る

すばむ

草堂のかけにくれけり
樂をううし船子ども

さどひくべし
どうとまぼむ

けしかな

ねもひ入さのやまはちれど
草木こゝろなけれども

相通かる

にほのうらみしづのにて
みつぼのくに

すますかな

これふくは
ねもはずは

のむかな

新月のいろ
念佛申かすく

重點にでり

里ん返ん、
ふんふんたる雪

はね字移り

御ねげんあり
いんやにんげん

叶韻かな

越王勾踐
富貴萬福

替かな

ゆふべくのかり枕
ゆをいにかへる

おなじく

いざやしらべん此つゝみべとめにかへる
ひふへにて心大ひに替る

ひふへ

おもひれもへおもふ
ひふへにて心大ひに替る

○義太夫語りの戯評 植字小僧が諸方のおさらひ杯を
聽て戯に評級を下したり面白ければ記す。

串柿淨瑠璃



天狗心増長の結果としてへたまりに
かたまりしもの。

紙虎淨瑠璃



上手ぶりて頸ばかり振れど腹の中は
からつばなり。

布袋竹淨瑠璃



聲音を頼に稽古不足節澤山のこど葉
小さきもの。

鳴淨瑠璃



未熟よて心よあせり水ばかり飲て躰
をもがくもの。

梅雨淨瑠璃



人を啼さんとして自らなき寂々とし
て鬱とし。

有髮の事―再び

釣深亭主人

予が前號に有髮無髮の疑問を喚起せし處千住の瓣香醉

史は來社の上彼の一の谷ころ近松半二都一鳥等の傑作
と稱せらるゝ者にて最も意を込し者なれば甚しき誤の
なき筈なり能々吟味せざる可からず想の字も間違には
あらざるべく有髮も其儘よしして可なるべし有髮といへ
は發心しても未だ髮を剃らざる者と見做し想といへは
思をこめたる意にして全く剃らずとも之を切拂ひて發
心したりとの想を充分含み居たりとの意なれば別に正
誤するまでもなしと語られたり此説尤なりと思惟す乍
去古の兜を蒙る者は髻にあらずして頸の少し上に結
び其端を頂に扁く撫でつけし者あり又低く一つ結び
て背後へ下けたるもあり中よと切り下けて今のをでつ
けの散髮の如くしたるも多ければ兜を脱て散髮となり
たるを見せたりとて發心の意を示すに足らず（或は一
層勇戦を勵まむ姿にも見ねなん）寧ろ甲冑共に一同に
脱ひて見せたらんには下の白無垢も墨染の法衣も一時
よ見わたる易くはあらずや如何も狂言なればとて斯

予が前號に有髮無髮の疑問を喚起せし處千佳の狐香酉

も廻り遠くして白無垢法衣に後へ廻し態に髪のもも疑はしく解し難く書たるは遇意か否か知ねども止むを得されは之も亦原文の儘よして置く?

桃の屋君も亦一辨を試まれたり(寄書欄参考)之も尤もの如く見ゆれども有髪も一理あるものとして變更を要せず其原本誤なしとせば只想の一字を誤寫なりとする説と如何と思ふ今こそ想像多きの字流行して珍らしからぬも其常時に於て之餘程考ふるも非されは筆生などの思違て書く字もあらず想と相と錯て書き違ひたるが如きは若やと考へたれども今は相の間違にもあらずと云ふ説確よ見れと想と僧との間違の如きは今更に斷言え難き様に覺ゆ猶他に意見のあらは寄稿せられよ。

女義太夫番附の發表よ就て一言

在來の番附は唯ヒイキ目より定めし者なり實は無茶苦茶是では何の役も立たぬと一番肌着脱ぎで着手ては

見たが扱其局に當て見るとなかく六ッ敷ものは男ならばコンナ事もあるまいと思へば何に付ても女ほど此世に罪な者はあし弊社義太夫部受持の壽勝子が諸子の投稿を酌酌し夜も碌も寐ずの撰定ウルサイと怒るにも關はすやレ誰は音聲がよいから大關だ誰は磨があるから其位置は可愛相だなど、側にてガミ付かるゝに困

り外ならば兎も角社から出すのにはソー勝手が出來ぬと漸々の事で此次第是では誰も不服だろうと云へは微笑も左様だと同意し尙公評を得絹飾にかけんと一決せしかは不服の諸子は七月中に寄稿し玉へ其上にて木版摺とし廣く販賣す併し可成他人向ふてドーカ親類的眼ですと「云ふよ云はれぬ義理あつて」とか何とか六シ敷譯になりませうから。但し寄稿は名前を出し升から直接購讀者の外は御斷り申す 壽樂

義太夫雜誌は

義太夫現世界の鏡なり 天 簞 子

雜報

○大隅團平の一行

昨年上京以來府下各席にて好評を得し同一座は去る十八日歸途に就き目下静岡にて興行なかくの大人氣なる由聞く處よれば其より名古屋西京を経て十月頃歸阪の都合なりと

○床本の豫約

日々加名者多きを爲め壽樂子は豫算より紙數の増加せしむも頼着せず既に印刷着手中なりとは當たりと。

○竹豊連

義太夫狂の霞子今度竹豊連と云ふを設け廣く粹士を蒐集て毎月會を催す由因に云ふ七月は弊社の内にて集會と定められたり。

○金杉ドクトル

喉頭専門にて有名の同氏が効績は屢耳にする處なるが過般大隅丈が喉頭を患し時も氏の治療を受け速に治癒せしめて同丈は大悅ひみて社員へ

○話

○竹本熊榮嬢

前年評判ありし同嬢は其後大阪にて藝妓となり今に勤め申なるか近々上京の上再び各席へ現はるゝやの風説。

○觀音靈記壺阪寺

大隅太夫丈の專有にて好評を得女太夫にては語る者希なるが今度小土佐嬢同丈より直傳し各席にて語らるゝ由因に云女太夫よて大隅丈より直傳せし者は同嬢一人なりと。

○燕太夫

同丈は今回大隅丈の一行と大阪に赴きたり勉むへしく。

○演藝月並勉強會

外神田の藝妓連が一種練磨的の會よて義太夫節あり清元あり手踊あり去る廿三日其第二回を外神田福田屋に開く記者も見物のお仲間入をせしがなかくの盛會なりと委しき評は次號で。

治療を受け速に治癒せしめて同丈は大悦ひみて社員へ

餘興 粹多樂誌

冠句附 題

にてくご。あきがこぬ。うけまゝ。うい。うい。

うけました伊達の語つた伊勢音頭

千佳 恍亭 寐男

でさき出さきで大隅と

下谷 よし川

いつも小住の明がらす

牛込 末廣家要人

女なからも小清ちゃん

麹町 知顔 太夫

掛やいとうぐ京枝れん

本郷 梅痴 生

小清はなにを語つても

神田 東紫 朗

義太夫雜誌うでそろひ

全 同 人

あきがこぬ越子のふしに綾のこゑ

本郷 梅痴 生

友次郎さんの三曲じや

千佳 恍亭 寐男

全 一二三ののどで玉三は 牛込 末廣家要人

全 好かかたれる義太夫は 市ヶ谷 喜樂亭與志

全 東代玉いつも笑とせて 神田 東紫 朗

全 千ヤリ義太夫と拙乍ら 全 同 人

全 惣掛合でことせめじや 麻布 可愛道士

全 うちかへるとは大隅子 神田 ねかだ

全 にこくと何處で小住の顔みても 千佳 恍亭 寐男

全 笑ふ小土佐の片ねくぼ 牛込 末廣家要人

全 可愛いことよ小春さん 芝 いろ 男

全 きゝたいなむすめ太夫の胸のうち 本郷 梅痴 生

全 是非に越路のつぼ坂が 牛込 末廣家要人

全 かたきの有家政右衛門 神田 たまご

全 越路太夫の來るたより 全 東紫 朗

きゝたいなア、きゝたいぢ壺坂が 本郷 香氣生

全 越路團平いつしよにて 下谷 數寄屋待人

滑稽調

にこくとソレ見たまへな熊梅が 赤坂 やつこ

秀逸

うけました聲とようすで綾のすけ 下谷 一もん内侍

あきがこぬはづ團平の三味線じや 大阪 松の家

うけました大隅さんばかへるまで 本郷 桑林軒

追加

きゝたいあとで袖袂かしをりもん 係 かすみ

一口はなし

社末 にこくと男

オイ下谷君三十三所の壺坂寺といふのは何處が本家本

元なのダ『おかしな事を問ふ男ダ何處ツて君子多敷

もある筈のものじやないサあの本よも有る通り大和路

サ澤市といふ色男の居た『デモ君壺坂寺は大隅に限る

と云ふ人も有るならサ。

課

情歌 愚痴 後朝 烟草

題

べ切は七月廿日一人十句限り延着除卷

文句入は十日限り(義太夫文) 三光本誌呈

申譯け 定日發発自慢の本誌が今回に限り遅せしは番
附調査の爲殊の外時日を費せし爲なれば此段惡しから
す御承知を願升又同番附二段目の榮糸とあるは竹本巴
の誤あれは此よ正す

拙者儀自今義太夫練磨會々員諸君に限り其面の長短を

オイしたぎくん
下谷君三十三所の壺阪寺といふのは何處が本家本
ほんけん

廣 告

○文明之兒童

毎月一回第拾九號既刊
一部前金貳錢五厘一ヶ
年二十七錢

本誌項目は演説、討論、研究、競争、筆戰、風雅之友、
雜件の七項にして小學生徒諸君の喝采を博せり故に一
本を購ふて見られよ益あること請合なり

○家内のめとまじ

毎月一回代價一部
前金壹錢五厘一ヶ
年拾八錢

本誌は文章平易にして何人たりとも些少文字を讀むも
のほ此誌を購へば裨益を得ること確實あり
○注意 本誌申込は切手代用二割増しのと

發行所

備中國小田郡笠岡町大字笠岡

徽州文社

投書 家諸君に 告ぐ
批評は可成公平願上候藝人の秘密をあば
き或は人身攻撃などに涉る者は採らず又お
禮の爲本誌送呈仕候も住所不明の爲返戻の
事有之候間實際の記名を乞ふ 徽 笑

私事都合により左の通り改名仕候

下谷區仲徒士町十番地語龍事改め

野澤鶴助

弊舖の寫眞は可成鮮明を主とし年を経るも變色なく且
可成廉價を主とし貴需に應じ約束の期限は履行可仕間
何卒御來車被下度願上候

五名家の寫眞私方お在之候

上野廣小路鳥八十の隣

吉川寫眞師

の誤あれば此より正す

拙者儀自今義太夫練磨會々員諸君に限り其面の長短を
問はず一葉は無謝義にて揮毫の依頼に應ず
淺草區小島町五十七番地木村事

畫工 燦雲仙史

義太夫雜誌の投書にて間々拙宅へ御郵
送有之候人御座候もかくては遺漏の恐有
之候得と必ず本社編輯局宛御發送の様願
上候也 服部 霞峯

上野停車場前山城屋旅舎

家屋潤大各室呼鈴の備あり食物は衛生を主とし夜具は
清潔にして凡て旅客の用を達するは迅速丁寧萬事油斷
なく勉強仕候間必ず第一泊の上御試を願ひ併て從來の
御客様方にも猶一層御愛顧あらん事を祈る

僊華琴

上製壹面撥付金三圓五十錢より
並製壹面撥付金二圓より二圓八
十錢荷造費金三拾錢

僊華琴は形體麗雅、音質優美、音量擴大、彈法容易、
携帶便利、且一器にて和漢洋の諸曲を彈するに適切な
るに大に世の賞讃を得たるを以て証すべし請ふ音樂の
志士試に彈味あらん事を

東京市麴町區有樂町三丁目一番地

取次所

音樂雜誌社

音樂雜誌

一冊金六錢半年分郵稅共よて
金三十五錢郵券代用一割増

本誌は歐洲樂、雅樂、能樂、明清樂、俗樂舞踊、音謠、
等新古を問はず樂譜を添へ解釋を附したる者なれば初
學者にも能く獨習し得るの便ある音樂の好同伴あり

發行所 東京市麴町區有樂町三丁目一番地
音樂雜誌社

竹豐連

し ら せ

竹豐連とは義太夫節を好む者が月に一度打寄りて
義太夫節に關する古今の珍話批評を相談する一の
同樂會なり集り第三土曜日の午後一時より始め連
費は出席の折金五錢つゝ持參の事凡ての報告は本
誌に記載す集會前日までに欠席の知らせ無時と集る者と見做す
申込書には宿所姓名を記すべし委細は御來談のこと
申込所は義太夫雜誌社の編輯局よて峰の家霞まで

社告 注意

!!! 社告

本誌の前金相切れ候時は發送の節帶封に朱書致候間御
覽の上は速に御拂込被下度候尙御沙汰なき時は發送の
義見合申候此段前以て申上置候也

本誌は凡て前金に候へは御注文のみにては發送不仕
候也

五月三十日

義太夫雜誌社會計係

遞信省認可

(明治廿六年
三月廿六日)

◎投書規則

投書は凡て到着の順序を以て掲載するも未完稿は之を
採らず○批評等にして類似の者ある時は其優れたる者
を掲載す○次號に譲し投書にして其事柄の既に陣腐と
認むる時は之を省く○誌上は匿名あるも投書は住所姓
名なき者は掲載せず○投書は眞書よて廿四字詰とし判
明に認め義太夫雜誌社編輯局宛にて送るべし○投書は
返却せず○問合せは往復はがき又は郵券封入の事

社告

本誌定價 一部三錢五厘 前金の分は本社へ
地方は一部に付郵送費五厘申受く
廣告料 一行廿四字詰四錢十行以上一割引
但義太夫謠曲に關する者に限り三割引とす
代金爲替半圓以下は郵便切手にて宜敷以上は
神田郵便電信支局振込受取人岡田廉二宛の事

發行所

義太夫雜誌社

東京市神田紺屋町四十四番地

明治二十六年七月六日印刷同

七日發行

東京市神田區紺屋町四十四番地

岡田 廉二

全市牛込區天神町三十五番地

鶴見 應

全市日本橋區南茅場町四十八番地

明昇 舍

發行兼編輯人
印刷所